

Cambridge Advanced Learner's Dictionary 第3版と第4版の 'Common mistake' ボックスの比較

藤本 和子

1. *Cambridge Advanced Learner's Dictionary* (以下 *CALD*) の第4版が、2013年に出版された。¹⁾ *CALD*は、英国出版社による学習者用英語辞典のいわゆる 'Big five' のうちの1つとして注目される辞典である。2008年出版の *CALD3* から5年を経ての改訂となるが、この5年の間には、インターネット関連などのテクノロジーのめざましい発達や、社会変化のために、日常触れる英語にも、語彙をはじめとして様々な変化が見られるはずである。社会の変化とそれに伴う言葉の変化を映し出し、辞典使用者の必要性にこたえることを目的とする辞典において、その改訂は重要な意義をもつ。

本稿では、*CALD3*と*CALD4*の学習者によく見られる誤りについてのノートが掲載された 'Common mistake' ボックスの項目や記述を比較し、英語学習者が、どのような誤りを犯すのか、そして学習者の犯しやすい誤りについて両版の間に、項目や記述の変化があるのかについて調査するとともに、英語指導において、学習者にどのような点に注意を促すとよいのかについてヒントを得ることを目的とする。本稿では、付属のCD-ROM版ではなく、ペーパー版を分析する。²⁾

2. まず、*CALD4*の特徴について見てみよう。*CALD4*では、新たにColin McIntoshがChief Editorを務めている。*Common Mistakes notes*を担当するのは、*CALD3*に

引き続きDiane Nichollsである。両版のカバーの情報によると、どちらも対象とする学習者は、upper-intermediateからadvanced レベルの英語学習者である。さらに、ケンブリッジ大学出版局のウェブ上には、CALD4は、the Common European Framework of Reference (以下CEFR) のC1からC2レベルの英語学習者向けであることが明記されている。³⁾

両版が基づく主要なコーパスは、書き言葉と話し言葉からなるthe Cambridge International Corpus (以下CIC) である。CALD3編纂時には、10億語を超える規模であったが、CALD4編纂時には、15億語以上であり、その規模は拡大している。大規模なコーパスデータを分析することにより、実際に英語がどのように使用されているのか調査し、自然な英語を学習者に示すことができる。さらに、両版が基づくコーパスは、the Cambridge Learner Corpus (以下CLC) である。これは、世界中の受験者の答案から収集した書き言葉からなるもので、CALD3の編纂された時点では、2,500万語以上(うち、コード化された1,000万語以上)、CALD4では、4,500万語以上(うち、コード化された2,300万語以上)の規模のデータベースである。CLCは、CICと同様に、モニター・コーパスであり、ケンブリッジ大学出版局のウェブ上の情報によると、‘the world’s largest Learner Corpus’ とある。⁴⁾ 両版ともに、CLCの分析に基づき、上級英語学習者によく見られる誤りについてのノートが‘Common mistake’ボックスの中に記述されている。

コーパスに基づく現代英語の変化についての研究が様々なされている中で、CALD4の定義や例文中にも、その変化の一端を見出すことができる。例えば、現代英語において、関係代名詞whichの頻度が下がり、関係代名詞thatの頻度が高くなっていることは、Leech et al. (2009)などでコーパスに基づいた調査がなされている。さらに、Leech (2012)によると、関係代名詞whichの頻度が下がり、関係代名詞thatの頻度が高くなっている理由として、‘prescriptivism (especially in the USA)’ と ‘colloquialization’ を挙げ、次のように述べている。‘The “Sacred That” rule is a label used ironically (by Arnold Zwicky) to refer to the prescriptive rule, found in word processing software as well as in usage guide books, etc., that that should be used instead of which in introducing restrictive relative clauses’. CALD4において、

例えば、**aardvark**の定義(‘an African mammal with a long nose and large ears that lives underground and eats insects’ [下線筆者])を見ると、CALD4では、CALD3で用いられていた関係代名詞whichに代わってthatが用いられている。その他に、‘Common mistake’ボックスの説明文においても、CALD4では、‘**Common mistake** boxes show you mistakes that learners of English often make . . .’ (p. xii, 下線筆者)のように、CALD3で用いられていたwhichが、thatに変更されている。その他にもCALD4には、規範的な面が見られる。例えば、両版の**them**の第2義(‘used to refer to one person whose sex is not known instead of saying “him” or “her”’)について、CALD4では、**them**のエントリー中に、‘Note’ボックス⁵⁾が設けられ、以下の記述が新たに入れられた。

Note:

Some people do not like this use, and prefer to use **him or her**:

When each passenger arrives, we ask him or her to fill in a form.

性別が分からないために、単数形の代名詞の代わりに、複数形の代名詞を用いることについての‘Note’ボックスは、**them**のエントリー中のみに見られ、その他、**they**、**their**、**everybody**、**everyone**などには見られない。かつ、**everyone**のエントリー中の例文には、**everyone**を**their**で受ける、*Everyone has their own ideas about the best way to bring up children.* (下線筆者)のような例文が掲載され、語法注記はなされていないことについては、辞典の記述の不統一性を感じる。

CALD4の新たな特徴として、30ページの‘Focus on Writing’セクションが設けられ、academic/formal/informal writingの特徴について、役立つ表現などとともにまとめられている。本稿では、直接、調査分析しないが、興味深いセクションと言えよう。⁶⁾

CALD4には、時代の動きを反映して、technology、media、language、society、lifestyleの分野の新語が掲載されている。CALD4 (p. viii)には、テクノロジーの分野の例として、**autocomplete**、**cloudware**、**QR cord**、**unfriend** (See **defriend**)が、

その他の分野の新語、**blogosphere**、**catch-up TV**、**on-trend**、**spray tan**、**helicopter parent** や、くだけた語として **eww**、**peeps** などが挙げられている。

CALD3とCALD4の変更点の1つに、語(句)や意味に付されたシンボルが挙げられる。学習者が習得する語の目安として、CALD3では、CICのデータに基づいた「頻度レベル情報」が、**E** (Essential)、**I** (Improver)、**A** (Advanced)のように付されている。これらは、高頻度の語のみでなく、頻度に関わらず学習者が必要とするものも考慮して選ばれている(藤本2009: 131-132参照)。一方、CALD4では、CEFRに基づいた**A1**から**C2**までのEnglish Vocabulary Profileの「レベル」による表示である。CALD4は、CICや、ケンブリッジが携わる試験からのデータを収集したCLCの分析結果に基づいた情報を掲載しているため、IELTS、BEC(ビジネス英語認定試験)などの試験対策に活用できることも特徴の1つとして挙げられる。

3. CALD3とCALD4に設けられた‘Common mistake’ボックスを比較分析してみよう。⁷⁾ 項目名は、CALD4の‘Common mistake’ボックスの名前を使用する。品詞が複数ある語(句)には、どの品詞についてのノートであるか明確にするために品詞を付す。ボックス中の記述すべてではなく、一部を引用する場合もある。両版の間に、英語表現に若干の違いがあり、それが内容に影響を与えない場合は、CALD4の記述を引用する(以下同様)。

3.1. ‘Common mistake’ボックスの数は、CALD3は385、CALD4は450⁸⁾である。CALD4のほうが数が多いが、その理由の1つは、学習者が犯しやすい誤りの項目が新たに掲載されたというよりもむしろ、CALD3で1つの‘Common mistake’ボックスに掲載されていた複数のタイプの誤りが、CALD4では、タイプ別に、1つのエントリー中に2つ以上のボックスに分割されて掲載されたケースが散見されるためである。例えば、**accommodation**は、CALD3では、この語の綴りと、BrEでは数えられない名詞として使用されることに注意を促す2つのタイプの誤りについてのノートが、1つのボックスに掲載されていたが、CALD4では、タイプ別に2つの‘Common mistake’ボックスに分割された。ボックスに付けられた項目名は、両タイプのボック

スともに**accommodation**である(つまり、**accommodation**の項目名の‘Common mistake’ボックスが2つある)が、CALD3の**especially**のように、CALD4では、**especially**と**especially or in particular?**のように、記述の分割と同時に、後者のような新たな名前が付けられたボックスもある。

Table 1は、CALD4のアルファベット順による‘Common mistake’ボックスの数を表す。

Table 1 ‘Common mistake’ボックスの数

A	40	J	3	S	36
B	21	K	6	T	28
C	46	L	29	U	8
D	17	M	16	V	3
E	28	N	15	W	30
F	19	O	12	X	0
G	8	P	21	Y	3
H	13	Q	1	Z	0
I	19	R	28		
				Total	450

3.2. 本稿では、CALD4の‘Common mistake’ボックスを、大きく7つのタイプに分類する。誤りによっては、複数の誤りのタイプに関連するものもあるため、大まかな分類であることを断っておきたい。7つのタイプは、1) 綴りに関するもの、2) 語(句)の混同に関するもの、3) コロケーションに関するもの、4) レジスターに関するもの、5) BrE、AmEなど英語の変種に関するもの、6) その他の語法・文法に関するもの、7) 社会・文化に関するものである。

紙幅の都合上、Table 1で‘Common mistake’ボックスが同数の28であった、E、R、Tのそれぞれの誤りをタイプ別に分類し、その結果をTable 2に示す。

Table 2 'Common mistake' タイプ

	E	R	T
1 綴りに関するもの	12	8	8
2 語(句)の混同に関するもの	6	7	10
3 コロケーションに関するもの	3	6	3
4 レジスターに関するもの	0	1	0
5 BrE、AmEなど英語の変種に関するもの	0	1	0
6 その他の語法・文法に関するもの	7	5	7
7 社会・文化に関するもの	0	0	0
Total	28	28	28

E、R、Tの比較では、1) 綴りに関するもの、2) 語(句)の混同に関するもの、6) その他の語法・文法に関するもの、3) コロケーションに関するものが、4) レジスターに関するもの、5) BrE、AmEなど英語の変種に関するもの、7) 社会・文化に関するものよりも多い傾向が見られる。

3.3. CALD4のそれぞれの誤りのタイプについて、例を挙げながら特徴を見てみよう。ここでは、CALD3とCALD4の両版に掲載された誤りの項目から例を挙げる。

3.3.1. タイプ1)の綴りに関する誤りには、(1) 1語あるいは2語綴りにするかといった正書法、(2) 動詞の活用形('verb endings')、(3) 形容詞や副詞の綴り('word-building')などの誤りを含む。ここでは、比較的項目数の多い(3)に焦点をあててみよう。次のi)からiii)のような簡潔な「綴りの法則」とも言えるものが随所に見られ、学習者には役立つであろう。

- i) **beautiful** Adjectives that end in the suffix **-ful** have only one 'l'.
- ii) **absolutely** If an adjective ends with 'te', just add 'ly' to make an adverb.
- iii) **personally** If an adjective ends with 'l', add '-ly' to make an adverb.

3.3.2. タイプ2)の語(句)の混同に関する誤りには、(1) 綴りや発音が似ているための混同、(2) 意味の混同、(3) 品詞の混同、(4) 語の選択についてなどの誤りを含む。それぞれの例を見てみよう。

(1) 綴りや発音が似ていて混同しやすいもの

leave or live? (v)

Warning: the verbs 'leave' and 'live' look and sound similar but have very different meanings. ⁹⁾

(2) 意味の混同

nervous

Warning: check the meaning! To talk about someone often becoming annoyed, don't say 'nervous', say **irritable** or **bad-tempered**:

The noise of the traffic makes him tired and nervous.

The noise of the traffic makes him tired and irritable.

(3) 品詞の混同

relax or relaxed?

Warning: do not confuse the verb **relax** with the adjective **relaxed**:

The atmosphere was very friendly and relax.

The atmosphere was very friendly and relaxed.

(4) 語の選択

little or small?

Remember: use **little** when you want to express an attitude or feeling such as disapproval or affection:

He is a nasty, selfish little man.

They have a sweet little dog.

To just refer to the size of something without expressing your feelings, use **small**:

Their house is quite little.

Their house is quite small.

これらはいずれも身近な語であり、日常生活の中で使用される頻度が高い。コミュニケーションにおいて、伝えたい内容を相手に正確に伝えるためには、上記の用法に留意したい。

3.3.3. タイプ3)のコロケーションに関する誤りについての情報は豊富に掲載されている。これは、英語表現を豊かにするため、かつ自然な英語運用のためには、コロケーションを習得する必要があるからであろう。ここでは、次の例を挙げてみよう。

solution

The correct preposition to use after **solution** is **to**. Don't say 'solution of/for something', say **solution to something**:

We must find a solution for this problem.

We must find a solution to this problem.

Solutionの後ろにくる前置詞は *to* であると記述されているが、ここで注意したいのは、ここでの **solution** の意味は、'the answer to a problem' であることである。例えば、*Longman Dictionary of Contemporary English* (以下 *LDOCE*) 第6版では、第1義 ('a way of solving a problem or dealing with a difficult situation') の場合には、この語の後ろにくる前置詞に、*to* とともに *for* を掲載している。*CALD4* の **solution** のエントリー中の定義を見れば、ボックス中のこの語の意味は 'the answer to a problem' であることが分かるが、学習者が誤解しないように、ボックス中の記述のし方に工夫が必要であろう。

3.3.4. タイプ4)のレジスターに関する誤りも注目される場所である。Spoken/written Englishの違いや、informal/formal Englishの違いを誤ると、聞き手、読み手に不快感を与えかねない。従って、英語指導において、状況による言葉遣いの使い分けをぜひ指導したいものである。

about or regarding? (prep)

Warning: about is usually only used to introduce a topic in informal styles. In formal writing, don't use 'About ...', use **Regarding ...** or **With regard to ...**:

About my wages, I kindly request that you review the situation.

学習者は、academic writingにおいて、これらの表現の使用に気をつけるとよいであろう。

3.3.5. タイプ5)のBrE、AmEなど英語の変種に関するものについては、*CALD4*は、the UKのみでなく、the US、India、Australia、South Africaで使用される語もより多く取り入れている。ここでは、BrEとAmEの違いについてのものを例に挙げる。

good or well? (adv)

Remember: good is not used as an adverb. To talk about something being done in a good way or to a high standard, don't say 'good', say **well**:

She did her work very good, but she was often late.

She did her work very well, but she was often late.

Warning: Some US English speakers use 'good' as an adverb, but many people consider this incorrect and it should not be used in exams. (波線筆者。以下同様)

AmE話者には、**good**を副詞として用いる人もいるが、多くの人がこの用法を誤りとみなすため、試験では使用すべきではないと注意を促している。上記引用破線部

(‘it should not be used in exams’)は、CALD4が試験対策に使用されることも考慮しており、学習辞典ならではの記述と言えよう。

現代英語において、容認度に異なりがあるため、試験での使用を避けるよう注記が見られるその他の例として、CALD3とCALD4ともに、**less or fewer?**を挙げている。つまり、*fewer buses*が正しく、**less buses*を誤りとみなす人もいるため、数えられない名詞の前には**less**を、数えられる名詞の前には**fewer**を用いるよう注意を促している。

Lessの後ろに数えられる名詞を用いる用法については、筆者は、かつてSusan Hunston博士からコメントをいただいたことがある。現代英語において、多くの人がこの用法を用いるが、博士自身はこの用法に抵抗があるとのことであった。¹⁰⁾ 言葉遣いには、人によってpreferenceがある。辞典が規範的な特徴をもつことは避けられないであろうから、どの程度まで現代英語の変化を辞典に掲載するかということは、辞典編集者のゴールのない課題とも言えようか。

3.3.6. タイプ6)のその他の語法・文法に関するものには、語順、冠詞の用い方、語のとり構造などについての誤りが含まれる。

中でも、副詞の位置についての誤りを避けるよう促すノートが多く見られる。副詞の位置についても、3.3.1.で見た「綴りの法則」ように、簡潔な「副詞の位置の法則」とも言える記述が、複数のボックスで繰り返されている。例えば、以下の**often**の例を見てみよう。

often

Often usually goes directly before the main verb in a sentence. . . . But if the main verb is **am/is/are/was/were**, **often** usually goes directly after it

「通例、副詞は、一般動詞の前に、be動詞の後ろに用いる」ということは、日本の英語教育でも早くから指導されるのではないだろうか。上級英語学習者でもこのようなword orderの誤りを犯すのは不思議な印象も受ける辞典使用者もいるであろう。

さらに、初級レベルの誤りと思われるが、上級英語学習者にもまだ見られる誤りの1つに、助動詞の後ろに、動詞の原形ではなく、動詞の活用変化形(例: **may**)や、‘to’付き不定詞を用いる(例: **should**) 誤りも掲載されている。これらのことについては、以下のCALD3 (p. VIII) の記述に、‘Common mistake’ボックスの編集方針が見られる。

Some teachers’ hearts may sink to think that advanced learners are still making mistakes which may seem basic, but the evidence of the *Cambridge Learner Corpus* means that our notes are based on real data, not on conjecture or wishful thinking! (CALD3: p. VIII)

また、抽象名詞に、不必要に定冠詞を用いる誤りも複数見られる(例: **life**、**nature**、**technology**)。ここでは、**technology**の例を見てみよう。

technology

To talk in general about the practical use of scientific discoveries, don’t say ‘the technology’, just say **technology**:

Advances in the technology have made our lives easier.

Advances in technology have made our lives easier.

その他、動詞の後ろに不必要な副詞を用いる誤りも複数見られる(例: **drop**、**fall down or fall?**、**find out or find?**、**rise up or rise?**)。動詞の意味につられて副詞を用いてしまうのであろうか。**Rise**の例を見てみよう。

rise up or rise?

To talk about something increasing in amount or strength, don’t say ‘rise up’, say **rise**:

Last year unemployment rose up dramatically.

Last year unemployment rose dramatically.

3.3.7. タイプ7)の社会・文化に関するものについては、項目数は多くない。**Native** (*n*)の例を見てみよう。

native (*n*)

Warning: one of the meanings of the noun **native** is offensive and old-fashioned. To talk about the people who live in a particular place, don't say 'natives', say **local people**:

The best way to learn the language is to get to know the natives.

The best way to learn the language is to get to know the local people.

CALD4において、名詞**native**の第2義('someone who lived in a country, especially in Africa, before Europeans went there')には、'offensive old-fashioned'と語法注記がなされている。日本の社会、そして日本の英語教育の現場において、「母語話者」の意味で「ネイティヴ」という和製英語表現が使用されているのをよく耳にする。「母語話者」は、*native speaker*であるが、英語学習者のみならず、英語を指導する立場にある教員も、CALD4の名詞**native**の第2義をよく認識し、「母語話者」の意味では、ぜひ*native speaker*という表現を用いたい。

3.4. CALD4で新たに設けられた項目は、以下の3項目である。しかしながら、(1)-(2)は、CALD4のペーパー版には掲載されていないが、CALD3付属のCD-ROMには'Common Learner Errors'としてCALD4と同様の記述が掲載されているため、厳密には、CALD4で新たに設けられた項目は、(3)の**train** (*n*)のみである。

(1) **refer**

Referの語形変化の綴りについて

CALD4 **Warning:** Check your verb endings! Many learners make mistakes when using **refer** in the past tense. The past simple and past participle have 'rr'. Don't write 'referred', write **referred**. The **-ing** form is

referring.

(2) **stuff or staff?** (*n*)

「職員(スタッフ)」には**staff**を用いることについて

CALD4 **Warning:** choose the correct word! To talk about the group of people who work for an organization, don't say 'stuff', say **staff**:

The staff do not have an adequate command of English.

(3) **train** (*n*)

「電車に乗る/電車から降りる」の表現及び、共起する前置詞について

CALD4 **Remember:** choose the correct preposition! Don't say 'get in/into the train', say **get on the train**:

I got on the train and sat down.

To talk about leaving a train, don't say 'get out of', say **get off**:

You need to get off the train at the last stop.

During the journey, you are **on the train**, not 'in the train'.

上記CALD4の波線部の用法については、例文が掲載されていれば、学習者にとっては、より理解しやすいのではないだろうか。

「電車に乗る/電車から降りる」の*get on the train/get off the train*という表現は、日本人英語学習者にとっては、馴染みがあるのではないだろうか。参考までに、日本人英語学習者が犯しやすい誤りに的を絞ってエラー・ノートに掲載している『ロングマン英和辞典』(以下LEJD)では、**car**の項目で、*get on/get in*の違いについて述べられている。

car 「車に乗る」の意味で*get on the car*は不可。 *get in the car*を用いる。 *get on the car*は「車の屋根の上に登る」という意味。しかし、「バス[電車、飛行機]に乗る」は*get on a bus/train/plane*を用いる。

「車に乗る」の意味で**get on the car*とは言わず、*get in the car*を用いることについての注記であるが、こちらのほうが日本人英語学習者には、役立つのではないだろうか。藤本 (2007: 68) では、*We got on the train for Kyoto.* を正用法であるとみなした日本人大学生が79.5%に対して、*We got on the car and left the town.* を誤りであるとみなした日本人大学生は31.8%にとどまった。

3.5. CALD3とCALD4の間に記述の変化が見られる項目について、例を見てみよう。

(1) behaviour

Behaviourの複数形について

CALD3 **Behaviour** does not have a plural form. Do not say 'behaviours'. Only say **behaviour**:

There can be many reasons for children's bad behaviours.

There can be many reasons for children's bad behaviour.

CALD4 **Behaviour** does not have a plural form except in specialized use. Do not say 'behaviours', say **behaviour**: . . .

CALD3では、**behaviour**には複数形はないと記述していたが、CALD4において、波線部 'except in specialized use' の記述が入れられた。しかしながら、どのような用法において、**behaviour**が複数形で用いられるのかについては、記述されていない。この語のエントリーにも、CALD3同様、数えられない名詞を意味する '[U]' のみが付されている。例えば、他の上級英語学習者用辞典 *Macmillan Dictionary and Thesaurus Free English Dictionary Online* (以下 MD (BrE/AmE)) (2014) には、どのような場合に、この語の複数形が用いられるのか述べられている。MD (BrE/AmE) において、BrEとAmEの綴りの違いはあるが、用法についての記述内容は同じであるので、ここでは、MD (BrE)の記述を引用する。

MD(BrE) Behaviour is usually an uncountable noun, so it is rarely used in the plural:

× Parents should be able to prevent their children's crimes or bad behaviours.

✓ Parents should be able to prevent their children's crimes or bad behaviour.

The plural form 'behaviours' is a specialized term used in fields such as psychology, social science, and education. This use is much less common than the uncountable use:

In this chapter, we discuss strategies for dealing with the problem behaviours of young children.

Behaviourは、通例、数えられない名詞として用いられ、複数形で用いられるのは、まれであるが、複数形は、「心理学」、「社会科学」、「教育」などの分野で用いられることが分かる。¹¹⁾

(2) the internet

The internetのtheの脱落の誤りについて

CALD3 To talk about the large system of connected computers in general, remember to use **the**. Don't say 'internet', say **the Internet**:

Many companies use internet to advertise their products.

Many companies use the Internet to advertise their products.

CALD4 To talk about the large system of connected computers in general, remember to use **the**. Don't say 'internet', say **the internet**:

Many companies use internet to advertise their products.

Many companies use the internet to advertise their products.

この項目は、「インターネット」の英語表現に、定冠詞 *the* を忘れないように用いる注意を促すノートであるが、興味深いのは、CALD3では、**the Internet** のように、'I' が大文字であるのに対して、CALD4では、小文字 'i' が使用されている。CALD3においても、見出し語 **the Internet** の後ろに、'ALSO **the internet**' のように小文字 'i' の綴りも紹介されていたが、CALD4において、見出し語が **the internet** に変わった。インターネットが生活の必需品になりつつある現在、この語の使用頻度が高くなり、利便性のため綴りが簡略化されつつあるのだろうか。¹²⁾

(3) **no one** (*pron*)

No one の綴り方について

CALD3 **Remember: no one** is not written as one word. Don't write 'noone', write **no one** or **no-one**:

I opened the door but there was noone there.

I opened the door but there was no one there.

CALD4 CALD3の波線部が削除された。

これら2語の間のハイフンの使用であるが、CALD3では、正用法として **no-one** も掲載していたが、CALD4では削除された(両版ともに見出し語には、ハイフン付き **no-one** は掲載していない)。**No one** のエントリー中の例文、*No-one told me she was ill.* (CALD3) も、CALD4では、ハイフンが削除され、*No one told me she was ill.* (CALD4) となった。例えば、LDOCE6には、見出し語として **no one** と **no-one** (*pron*) の両方の綴りが掲載されている。

3.6. CALD3にはあったがCALD4で削除された項目を見てみよう。¹³⁾

(1) **build up or build?** (*v*)

Build の後ろに必要なない **up** を用いる誤りについて

CALD3 To talk about making something by putting bricks or other materials together, don't say 'build up', say **build**:

The new supermarket will be built up next to the park.

The new supermarket will be built next to the park.

(2) **increase** (*n*)

Increase (*n*) と用いられる前置詞について

CALD3 When you are talking about a thing that has increased, the most usual preposition to use after **increase** is **in**. Don't say 'an increasing of something', say **an increase in something**:

There has been a 2% increase in the rate of unemployment.

Remember: when **increase** is followed by an amount, the correct preposition is **of**:

There has been an increase of 2%.

(3) **part-time** (*adj*)

形容詞 **part-time** の綴り方について

CALD3 Remember that when we use **part-time** as an adjective, it is most usual to keep the hyphen '-' between 'part' and 'time':

I have a part-time job in a bank.

I have a part-time job in a bank.

(4) **programme or program ?** (*n*)¹⁴⁾

コンピュータプログラムにはBrEでも **program** を用いることについて

CALD3 **Warning:** Choose the right word! To talk about the set of instructions to make a computer work, don't say 'programme', say **program**:

What computer programme are you using?

What computer program are you using?

(5) **will** (modal verb)

助動詞 **will** の後ろに動詞の原形を用いることについて

CALD3 **Will** is usually followed by an infinitive verb without 'to'. Don't say

'will did something', say **will do something**:

A special bus will collect you from the airport.

A special bus will collect you from the airport.

その他、学習者コーパスCLCの分析結果、以下の誤りは学習者が犯す頻度が下がったためか、CALD4において、CALD3の 'Common mistake' ボックス中の記述の一部が削除された項目もある。例を挙げてみよう。

(1) **different**

Different の後ろに複数形の名詞を用いることについて

CALD3 **Warning:** when using **different** to refer to more than one thing, remember to use the plural form of the noun:

The students all come from different country.

The students all come from different countries.

Remember: say 'a different kind of something', but **many different kinds of something(s)**.

(2) **go** (v)

Go の後ろの構造について

CALD3 **Warning:** do not use the infinitive with *to* after **go** to talk about leisure activities. Don't say 'go to fish/shop/sail/hike', say **go fishing/shopping/sailing/hiking**:

Let's go to camp at the weekend.

Remember: do not use a preposition between **go** and the leisure activity verb:

We went for swimming in the lake.

(3) **government**

Government の綴りについて

CALD3 **Warning:** Check your spelling! **Government** is one of the 50 words most often spelled wrongly by learners.

Remember: the correct spelling has 'n' before the 'm'.

Government は、CALD3では、CLCのデータに基づく 'The Top 10 Spelling Mistakes' (p. EH13)のうちの第3位であった。参考までに、CALD3では、1位は **accommodation**、2位は **which** であった (ゴシック体の部分を誤りやすい)。

3.7. CALD4は、ESL/SFL学習者用の辞典であり、日本人英語学習者が犯しやすい誤りもあれば、そうでないものも掲載されている。英語指導においては、どの誤りに気をつけるか、担当する学習者の特性などによる判断が必要とされる。¹⁵⁾ 例えば、**go or get?** の記述は日本人英語学習者に役立つのではないだろうか。

go or get? (v)

Warning: choose the correct verb! To talk about reaching or arriving at a particular place, don't say 'go to', say **get to**:

It takes two hours to go to London from here.

It takes two hours to get to London from here.

動詞のアスペクトにも関係する誤りであり興味深い。日本語では、「ここからロンドンまで行くのに2時間かかる」と言うので、「行く」に **go** を用いる日本人英語学習者は多いかもしれない。同様に、日本語の干渉によって起こりうると思われる誤りに **newspaper** がある。

newspaper

Remember: use the correct preposition. Don't say 'on the newspaper', say **in the newspaper**:

I read an interesting article on the newspaper.

I read an interesting article in the newspaper.

日本語で、「新聞紙上で読んだ」というが、*on the newspaperとは言わない。

その他、**an or and?**や**it or it's?**のような、綴りの類似や発音の類似(あるいは、*an*と*and*は弱音で発音すると発音が同一になりうる)による意味用法の混同に関する誤りを日本人英語学習者が犯す頻度は、今後どのように変化するだろうか。発音が類似する語(句)の混同については、英語を耳にすることが日常的である母語話者や、ESL学習者には、誤りがより多く見られるであろう。実際に、**it**と**it's**の混同による誤りは、英語母語話者の英語教員の書き言葉にも見られることがある。日本の英語教育においても、リスニングやスピーキングの機会がより多く取り入れられるようになると、このような誤りの頻度は高くなり、指導の必要性が高くなるかもしれない。

さらに、formal/informalの言葉遣いについての指導も重要である。例えば、**gonna**の項目にも見られるように、**going to**の代わりに、あらたまった話し言葉や書き言葉で、くだけた表現の**gonna**を用いることは避けたい。

3.8. その他、CALD4の'Common mistake'ボックスについて気づいたことを述べてみよう。

CALD3とCALD4を比較して、記述の変化の1つに数字の表記法がある。CALD4において新たに設けられた'Focus on Writing'セクションには、数字の表記法について以下の記述がなされている。

In general English, numbers can be written as words or figures. It is common to use words for numbers up to 10 or 12 and figures for larger numbers. In scientific or mathematical writing, figures are always used. (p. C7)

例えば、**decrease** (*n*)の例文中では、CALD3の*There has been a 2% decrease in the rate of unemployment.* (下線筆者)の2%が、CALD4では*two percent*となった。12以下の数字だからであろう。一方、例文中に12以下の数字が用いられている場合でも、**persons or people?**では、**person**の複数形の用法について、CALD3の例文中の*4 persons*がCALD4でも*4 persons*のまま変更されていない。

persons or people?

Persons is usually used in official language, especially in public notices or legal documents:

Attention: This taxi is licensed to carry a maximum of 4 persons.

次に、見出し語のエントリー中の記述と'Common mistake'ボックス中の記述の非連携性を指摘しておきたい。このことは、コロケーションに関するタイプの'Common mistake'ボックス中に見られる。つまり、ある語と共起する語が複数ある場合、その共起語の掲載順が、エントリー中と'Common mistake'ボックス中で異なることである(例: **party** (*n*), **research** (*n*), **survey** (*n*))。ここでは、**party** (*n*)を見てみよう。

party (*n*)

Warning: Choose the right verb! Don't say 'offer/make/prepare a party', say **throw/give/have a party**:

I am making a surprise party for my sister.

I am throwing a surprise party for my sister.

ボックス中の、動詞の順序は、**throw/give/have a party**であるが、**party** (*n*)のエントリー中の例文では、*Peter has /gives/throws really wild parties.*のように、**has /gives/throws**となっている。コロケーション情報において、ある語の複数の共起語を掲載する場合、頻度は考慮していないのか疑問である。

4. CALD3とCALD4の上級英語学習者によく見られる‘Common mistake’ボックスを比較分析した。コーパスデータに基づいたボックス中の記述を分析することにより、学習者がどのような英語の誤りを犯すのかについて知ることができる。CALD4は、ESL/EFL学習者用の辞典であり、日本人英語学習者が犯す可能性の低いと考えられる誤りも掲載されているため、英語指導においては、学習者の発信する英語により、どの誤りに、より注意をすべきか、状況においた判断が必要とされる。

CALD4のカバーの裏面に、CALD4は、‘perfect as a reference tool and as a study companion’そして、‘perfect for exam preparation’と記述し、CALD4の特徴を表している。辞典使用者は、このような辞典の特徴、そして辞典に基づくコーパスの特徴を理解した上で、辞典を使用するとより効果的な辞典の活用ができるであろう。

「英語は絶えず変化している」とはよく言われるが、まさにその変化を捉える大規模コーパスのデータ分析の重要性とその活用性は、今後ますます高まるであろう。英語を指導する上でも、ぜひ、英語の変化とともに、学習者の犯す誤りやその変化をつかみ、日々の指導に生かしてゆきたい。

Notes

- 1) ケンブリッジ大学出版局は、1995年に*Cambridge International Dictionary of English*を出版し、2003年の改訂で、現在の*Cambridge Advanced Learner's Dictionary*のタイトルとなった。
- 2) CALD4 (p. viii)では、CALD4付属のCD-ROMや*Cambridge Dictionaries Online*などの便利さにも触れている。パソコンやインターネットへのアクセス環境がこれほど広がっている社会においては当然のことと言えよう。しかしながら、興味深いのは、CALD4 (p. viii)は同時に、CALD4ペーパー版出版の意義にも言及していることである。エントリー中の記述が長い場合には、必要な情報を見つけにくいので、CALD4ペーパー版のデザイン性、例えば、学習者の語句の意味検索に役立つように、ガイドワードを大文字やカラー刷りにしていることなどに触れている。ケンブリッジ大学出版局のペーパー版辞典の発行の意義付けとも言えようか。すでに、学習者用英語辞典の*Macmillan English Dictionary for Advanced Learners*は、ペーパー版の第2版(2007)を最後にonline dictionaryに移行しており、ペーパー版は出版していない。
- 3) Cambridge English. 2014. Cambridge University Press. Available at <http://www.cambridge.org/> (accessed 5 May 2014).
- 4) Cambridge English. 2014. Cambridge University Press. Available at <http://www.cambridge.org/> (accessed 5 May 2014).

- 5) CALD3とCALD4で設けられているボックスは、本稿と比較する‘Common mistake’ボックス以外に、‘Usage note’、‘Other ways of saying . . .’、‘Word partners for . . .’の4種類である(藤本2009: 132参照)。CALD4は‘Common mistake’ボックスの他に、‘Usage’、‘Other ways of saying . . .’、‘Word partners’、そして新たに設けられた‘Note’の5種類である。CALD4で新設された‘Note’ボックス中の記述の多くは、CALD3において、エントリー中に‘USAGE’ノート(ボックスに入っていないノート)として掲載されていたものである(例: **Esquimo**)。その他、CALD3の‘Common mistake’ボックスの一部が、CALD4のエントリー中に‘Note’ボックスとして設けられたものもある(例: **advise**)。
- 6) この‘Focus on Writing’は、CALD3でSenior Commissioning Editorを務めたElizabeth Walterが担当している。
- 7) CALD3の巻末ページ(pp. EH13-EH17)に設けられていた誤りのタイプ別‘The Top 10 Mistakes’の具体例は、CALD4では削除された(藤本2009: 134-136参照)。
- 8) ‘Focus on Writing’中の‘Common mistake’ボックス**accommodation**、**explain**は、本体中のものと同じであるためカウントしていない。
- 9) どちらも基本的な単語であり、発音も違うが、筆者の英国滞在中、筆者と英国人ネイティブ・スピーカー、あるいは筆者とESLとしての英語を用いるスピーカーとの間の会話で、聞き間違いや聞き直しが、実際に、しばしばある。会話の際には、これらの語の明確な発音を心がけた。
- 10) Susan Hunston (personal communication, 28 November 2012).
- 11) *Macmillan Dictionary and Thesaurus Free English Dictionary Online* (2014) (MD (BrE/AmE)). Macmillan Publishers Limited 2009–2014. Available at <http://www.macmillandictionary.com/> (accessed 5 May 2014). その他、藤本(2010: 51-52)参照。
- 12) あるものが日常生活において身近なものになり、使用頻度が上がると、綴りが簡略化される例として、**email**が挙げられよう。ハイフン付きの**e-mail**から、ハイフンのない**email**へと綴りが変化している。CIDEでは、ハイフン付きの**e-mail**が掲載されており、‘a system’に関する意味での数えられない名詞としての用法のみが見られたが、CALD初版から、ハイフンのない綴り**email**が、**email**, e-mailの順で掲載され、かつ、‘a message’の意味をもつ数えられる名詞としての用法も新たに加わった。
- 13) **Write**のように、CALD3の‘Common mistake’ボックス中にあった記述の一部が、CALD4では、‘Usage’ボックスに移動された記述もある。
- 14) この項目は、CALD4のペーパー版では削除されているが、同版のCD-ROMには‘Common Learner Errors’としてCALD3とほぼ同様の記述が掲載されている。
CALD4のCD-ROM版には、CALD3の情報がアップデートされないまま掲載されていたり、3.4.で述べたように、CALD3のCD-ROM版にすでに掲載されていた情報が、CALD4のペーパー版に新たに掲載された記述もある。
- 15) *Cambridge Learner's Dictionary* (『小学館－ケンブリッジ英英和辞典』2004. [以下CLD])には、CLCの日本人英語学習者データを分析して日本人英語学習者が犯しやすい誤りを‘Common Learner Error’というコラムに掲載してあるので参考になる。本稿で扱った学習者の犯しやすい誤りの項目のうち、**go**の使用についての誤りについて、CLDの「Do not say ‘go to -ing’. Say ‘go -ing’ . (「～をしに行く」を表すときは、go+-ingの形をとる)」に相当するものは、CALD3には掲

載されていたがCALD4では削除された。その他、**native**についての誤りに関して、CLDの「Do not say **native** to mean **native speaker**. (「母語話者」にはnative speakerを用いる。nativeは「(元からの)住民」の意味)」に相当する項目は、CALD3とCALD4の両方に掲載されている。

References

- 赤須 薫. 2014. 「Big 5 誕生とその後」『英語教育』第62巻第13号, 14-16. 大修館書店.
- 藤本和子. 2007. 「『ロングマン英和辞典』のエラー・ノートについて—日本人英語学習者のCommon Errorsと学習者コーパス」『英語英文学研究』第61号, 59-75. 創価大学英文学会.
- 藤本和子. 2009. 「Longman Dictionary of Contemporary English⁵ (2009)とCambridge Advanced Learner's Dictionary³ (2008)の比較—Common Error/Mistake Notesについて—」『英語英文学研究』第65号, 129-148. 創価大学英文学会.
- 藤本和子. 2010. 「Macmillan English Dictionary for Advanced Learners第2版の'Get it right' boxについて」『英語英文学研究』第66号, 39-59. 創価大学英文学会.
- 藤本和子. 2013. 「Collins COBUILD English Grammar第3版に見る現代英語の文法の諸相」『英語英文学研究』第73号, 75-88. 創価大学英文学会.
- Hands, P. (ed.). 2011. *Collins COBUILD English Grammar*. 3rd ed. Glasgow: HarperCollins Publishers. (CCEG3)
- Leech, G. et al. 2009. *Change in Contemporary English: A Grammatical Study*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leech, G. 2012. 'How Do Standard Languages Change? A Case Study of Recent Developments in English Grammar'. 「創価大学人間学会・英文学会共催特別講演会」. 創価大学. 16 October 2012.
- Cambridge Advanced Learner's Dictionary*. 2003. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cambridge Advanced Learner's Dictionary*. 2nd ed. 2005. Cambridge: Cambridge University Press. (CALD2)
- Cambridge Advanced Learner's Dictionary*. 3rd ed. 2008. Cambridge: Cambridge University Press. (CALD3)
- Cambridge Advanced Learner's Dictionary*. 4th ed. 2013. Cambridge: Cambridge University Press. (CALD4)
- Cambridge Dictionaries Online*. Cambridge University Press 2014. Available at <http://www.dictionaries.cambridge.org>. (accessed 5 May 2014).
- Cambridge International Dictionary of English*. 1995. Cambridge: Cambridge University Press. (CIDE)
- Cambridge Learner's Dictionary* (『小学館—ケンブリッジ英英和辞典』). 2004. Tokyo: Cambridge University Press and Shogakukan Inc. (CLD)

- Collins COBUILD Advanced Dictionary of American English*. 2007. Boston: Thomson Heinle.
- Collins COBUILD Advanced Dictionary of English*. 7th ed. 2012. Boston: Heinle Cengage Learning.
- Longman Advanced American Dictionary*. 3rd ed. 2013. Harlow: Pearson Education Limited.
- Longman Collocations Dictionary and Thesaurus*. 2013. Harlow: Pearson Education Limited.
- Longman Dictionary of Contemporary English*. 5th ed. 2009. Harlow: Pearson Education Limited. (LDOCE5)
- Longman Dictionary of Contemporary English*. 6th ed. 2014. Harlow: Pearson Education Limited. (LDOCE6)
- Longman English-Japanese Dictionary* (『ロングマン英和辞典』). 2007. Harlow: Pearson Education Limited. (LEJD)
- Macmillan Dictionary and Thesaurus Free English Dictionary Online* (2014) (MD (BrE/AmE)). Macmillan Publishers Limited 2009–2014. Available at <http://www.macmillandictionary.com/> (accessed 5 May 2014).
- Macmillan English Dictionary*. 2002. Oxford: Macmillan Education.
- Macmillan English Dictionary for Advanced Learners*. 2nd ed. 2007. Oxford: Macmillan Education.
- Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary*. 2008. Springfield, MA: Merriam-Webster, Inc.
- Oxford Collocation Dictionary for Students of English*. 2nd ed. 2009. Oxford: Oxford University Press.
- Oxford Dictionary of English*. 2nd ed. 2003. Oxford: Oxford University Press. (ODE2)
- Oxford Dictionary of English*. 2nd ed. (revised) 2005. Oxford: Oxford University Press. (ODE2, revised)
- Oxford Dictionary of English*. 3rd ed. 2010. Oxford: Oxford University Press. (ODE3)
- The BBI Combinatory Dictionary of English*. 3rd ed. 2009. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- The New Oxford Dictionary of English*. 1998. Oxford: Oxford University Press. (NODE)
- Cambridge English. 2014. Cambridge University Press. Available at <http://www.cambridge.org/> (accessed 5 May 2014).